

対談

名古屋工業大学 高橋 実 新学長
名古屋工業会 篠田 陽史 理事長に聞く司会／名古屋工業会広報委員会委員長
北村 正 (Es48)

1月26日（金）、名古屋工業大学の新学長に選任されました高橋実先生と、名古屋工業会理事長篠田陽史氏の対談取材しました。ますます変革が迫られる大学運営の中で名古屋工業大学の直面する課題と、そこで名古屋工業会が果たすべき役割についてお話を伺いました。

北村 高橋実先生が学長に選任され、この記事の掲載時には就任されています。まず、高橋先生に今のお気持ちをお聞かせください。

高橋 一般的に言えば、身が引き締まる思いですというところからはじめるべきでしょうが、法人化後から運営サイドに加わり活動をしてきまして、一番感じていることは名工大はもっとよくできる、なるべきだ、これがトップになったときの学長の義務であろうと思います。

もう1つは法人化以後、第二の荒波、たとえば道州制、国立大学の再編統合など、まだ先の話と思いますが、何年か後にこういったことがありうるということが頭にあります。そういう

事態が押し寄せたとき、本学が独立した個性ある大学として存続できるように運営してゆくこと、これを学長の責任としてなしとげたいと思います。あれがターニングポイントだったと、後で分かるようなことではいけません。いつも注意深く、センシティブな嗅覚をとぎすましておきたいと思います。

自民から民主へ政権交代の中で、大学・高等教育を含めていろいろな施策が変更、提示されてくると思います。そういう施策がでてくる前に、大学人として自主改善努力、改革が必要です。一番大きいのは国民、社会に見えるような大学にしてゆくこと、もう一つは国内外で本学のプレゼンスをさらに向上させてゆくことです。このためには、まず、一人ひとりの教職員・学生個人の人格、活動を尊重した上で、ベクトルの向きを合わせていかなければなりません。

いま述べてきたことは、正直言って執行部と、一般の先生方とで意識がものすごく乖離している可能性があります。ただ、それを危機感として一方的に煽るだけでは大学はよくなりません。運営サイドの立場としては教職員が教育



名古屋工業大学学長 高橋実



名古屋工業会理事長 篠田陽史

研究活動にいきいきと取り組めるようなキャンパス環境を作っていくのが大事だと考えています。

本学は官立の高専から始まったということで、トップダウンに設置されていますので個別の大学としては設置趣旨はもっていません。そこは私学との大きな違いです。大学になったときの初代学長の清水勤二氏は、名工大は東大、京大と異なり、単にアカデミックな学術研究を目指すのではなく、社会に貢献できる工学をめざすのだ、と言っていますが、建学精神として述べられているのはこれだけです。もう一度整理して、5、10年またはもう少し長期の視点で本学構成員全員が共有できる、名工大憲章を本学が永らく依って立つべき拠りとして学内のコンセンサスを得て作っていきたいと考えています。

これらを踏まえて、改めて身が引き締まる思いと申し上げたいと思います。4月まであと一カ月のところで、やはり責任の重大さがひしひしと押し寄せてきているというのが実感です。

北村 理事長は学内の委員もいくつかやっておられ、学長選も関わられました。大学の学長に関して、どういうイメージでしょうか？ 会社とは大分違うのでしょうか。

篠田 大学の学長は、会社の社長よりもっと大変だなという感じがしますね。もっている権力に関して、会社の社長の最も大きな権力は人事権ですが、学長が人事権をもっているのか、成果に対する査定やそれに基づいた給与の決定権をもっているかという点、ほとんどないような状況です。学長は本当に人格だけで進めなければならないかと思うと、これは大変だと思います。

私も名古屋工業会の理事長を二年やって感じたのは、大学が国立大学から国立大学法人に変わったのは本当に大きな改革だということです。極端な言い方をすれば、私立大学とさして違いはなくなってきている。まだ、運営交付金

はでていますが、国の総予算の半分が国債・借金という状況ですから、大学の方も、本当にお金を出してもらっては無理な方向へ向かっています。では、私たちは卒業生としてなにができるか、これを考えなければならない。本当に学長は大変だと思いますね。

名工大の直面する課題

北村 変革の多い世の中で、名工大が直面する課題について、お聞かせいただけますか。

高橋 中期目標・計画と重なりますが、ベース部分でお話します。国公立を共通して学生募集が重要テーマです。定員充足の問題ではなく、如何に質の高い学生を確保するのかです。

高等教育はエリート型、マス型、ユニバーサル型と分類されます。大学進学率が15%以内をエリート型、50%までがマス型、それを超えるとユニバーサル型です。今、日本はユニバーサル型に突入しました。短大を含めると少し前からです。篠田理事長のころはエリート型の最後でしょうか。

こうした状況で目的を含めて教育が変わってきています。その中でどういう学生を入学させるか、名工大では基本的に高卒男子が入学してきたわけですが、女子学生、留学生、社会人学生をどう入学させてゆくかを考えないといけません。また、地域構成でも名工大は東海三県が多くを占めますが、沖縄から北海道に及ぶ地域の学生をどう入学させるかが課題になります。

次は、法人化前にも議論をしましたが単科大学としての存在意義です。世界的な潮流としては、多くのトップクラスの大学が総合大学に向かっていきます。特に、中国、アジアがそうです。例えば、中国北京の二つの大学、清華大学と北京大学でも、清華大は工学系、北京大学は文系でしたが、どちらも総合大学になってきています。国際競争の中で総合大学が有利であるということがあります。このことはしっかり考える必要があります。

他に、ナショナルセンターかリージョナルセンターかという問題、世界に発信してゆくのか地域貢献中心かといった問題、都市型大学か地方大学かといった問題も、整理していきたいと思います。名工大は都市部にありますが、本当の意味での都市型の機能を考えてゆきたいと思えます。

質の高い教育のための1つの指標に、教職員一人あたりの学生数がありますが、名工大はこの点で有利ではありません。教職員の能力アップと、質の高い教育システムの構築が必要です。財務面は最も頭を痛めます。運営費交付金の削減を止めてほしいといったことを、よく教員の皆さんから要求されます。国にねじ込んででも打破するのが学長の仕事だといった声もありますが、これは現在の状況ではあり得ません。

篠田 今の国家予算の状況でそれは考えられません。今後も減る覚悟をしなければなりません。

高橋 それには外部資金、競争的資金の獲得に努めなければなりません。研究企画院、産学連携センターを通じて早めに情報を教員に提示し、獲得できそうな資金をきちんと獲得する必要があります。関連して間接経費、共通経費の見直しも必要です。資金をとるとこれを運営する事務作業が発生します。資金をとって大学の財務が却って苦しくなるようでは困りますから。もう1つ外部資金の関連で研究スペースの問題があります。外部資金を獲得し、研究員の増員、装置の導入があっても、それ推進するためにスペースが必要です。早めに対策をとりたいと思います。

効率の改善でも努力してゆきます。名工大は他大学に比べて情報システムの導入では抜きでています。松尾情報基盤センター長に努力いただき、事務の効率化等、経費削減につながっています。

さらに、名古屋工業会にもお願いしないといけないですが、100周年基金（募金）の拡充を図りたいと思います。専任スタッフやその活動の仕組みなど、確実な収入源となるしくみを名

古屋工業会と連動して作っていきたいと思います。

本学は御器所キャンパスがメインですが、多治見と千種があります。千種はグラウンドですから、いつもだれかが使っているということは難しく、効率面で問題が指摘されています。千種を含めた総合的な整備を考える必要があります。

概括的ですが、以上が課題です。

優秀な学生に入学していただくために

北村 多様な学生を入学させることについてのお話がありましたが、名工大は東海三県が学生の大きな割合を占めます。企業でも採用は地元が中心になっているのですか？

篠田 そのような選り好みをしているようなことはありません。自動織機では社員の東海三県出身者の比率は半分程度だと思います。

昔の卒業生は日本全国に散っています。地元就職するという考えは少なかったんです。電気は全国9電力に、土木は官庁とゼネコンに就職しました。ゼネコンに就職すると日本中の支店を回ります。建築も大きな工務店、そしてやはり官庁です。金属も大きな金属の会社はこの地域にはあまりありませんから、日本全国に行きました。繊維（W）も紡績会社が多い大阪周辺を中心に、日本全国に工場を持っていますから散らばります。つまり、出身は東海でも全国に散らばります。

それが最近は一入っ子が多く、おじいちゃん、おばあちゃんが地元から出ないようにプレッシャーをかけるので、地方から名工大に来て、また地方に就職するのは少ないのではないかと、というのが松井先生の意見ですね。でも、確かに出身地に帰ってきて欲しいというのはあるようですが、大学は遠くでもいいよ、と言うように思います。

高橋 はい、私もそう感じますね。戻ってきてほしいのは、就職ではないかと。

篠田 たとえば、ゼネコンに入った人が、退職後その地で建築事務所を開業されるケースが多いですが、そういう方から子弟を名工大で勉強させたいとよく聞きます。きっと、名工大時代の思い出がよかったのだと思います。また、土木出身で各地の公務員になっておられる方も、子弟には名工大を卒業させて、その地方の官庁に就職してもらいたいと思っている人が多いように思います。その地域の企業、役所も名工大の卒業生であれば是非というところも多いですから。

そう考えると、日本全国の各地方からよい学生に来てもらうしくみを作れると思います。むしろ、名古屋地域で就職してもらわず、学生の出身地域に戻って就職してもらえばいいと思うのです。

卒業生に、子弟やお知り合いの優秀な学生を紹介してもらうシステムを作れるのではないかと思います。卒業生は大変母校への思いが強いですから。名古屋工業会の仕事としてやれないだろうか、これは名古屋工業会としても名工大としてもよいことではないかと思うのです。名古屋工業会を通じて、よい学生を紹介させていただき、大学にはそれをフォローしていただきたいと思います。

高橋 就職は地元かもしれませんが、大学としては全国から集めることはあり得ますね。各地に出向いて大学の紹介をするような機会を作ってもよいように思います。

篠田 もう一つ、単科大学の存在意義ですが、特色ある単科大学という意味がとても大事だとおもいます。内容面から大変特色のある学科があります。一方、機械工学などは、工学一般を学ぶ学科で、特別な特色はないとも見えますが、工学を大変広く学んで、就職してからはマネジメントでもなんでもやる可能性がある。こういったことも特色です。総合大学ではそういう点も違います。総合大学で入学しても、入ってから例えば、建築にと思っても、定員がありませんから進めないかもしれない。単科大学で、そ

れぞれの学科が特色をもち、その学科をやるために入学してきます。名工大に入学するというより、名工大の機械工学に入学するのですから。

名工大の第二期中期目標・計画について

北村 では、つぎに第二期中期目標・計画の特徴をお聞きしたいと思います。

高橋 中期計画の前段に、概要と特徴を書く箇所があり、7つの項目を挙げていますのでこれを中心にお話しします。(次ページ参照)

1つ目は教育についてです。教え込むというより、自分で学ぶ教育を実践したい、汗を流す、実践を教育するよう取り組みたいということです。

2つ目に、国際的な教育研究拠点の構築に関するものです。セラミックス部門を中心に推進し、他の分野も含めて進めたいと思います。

3つ目は現在の産業、そしてこれから先に興ってくるであろう産業で活躍できる人材の育成に関するものです。このため、新しい視点での教育改善も必要と考えておきまして、現在のための作業グループをつくっているところです。

4つ目は国内外の大学・研究機関との連携です。これによって国際レベルの研究を推進し、教育研究活動を高度化・多様化します。

5番目は学生や若い研究者を積極的に武者修行させようというものです。いろいろなプログラムを進めていこうとしていますが、まず材料系と情報系について派遣プログラムを始めました。

つぎは学生に大学構成員としての自覚をもっただけというものです。今でもキャンパスミーティングとして、学生と大学が話し合う場を設けていますが、これを拡大してゆくことがあります。たとえば、デザイン系の学生が自分たちのデザインしたものを売り出すとか、回収したペットボトルを廃材プラスチックと混ぜて売るとか、キャンパス周辺の清掃をすすめる

など、学生の活動を是非大学として応援したいということもあります。現役の学生がよりいっそう大学に愛着を持っていただくことではじめて、卒業後に大学を支援していただくことも可能になるでしょう。

最後のキャンパスの情報化は先ほどお話ししました。さらに推進していきたいと思います。

名工大は何に重点を置くか、即ち機能別分化についてお話しします。個別の学科とは別に、大学全体としてどういう個性を発揮するかです。

まず優先するのは、高度職業人の養成です。これを達成するにも世界の水準が上がってきておりますから、教える側のレベルを維持するためにも、次に優先したいのは教育研究の世界的拠点の形成です。これと並んで優先したいのは産学官連携等を通じた社会貢献、地域貢献の機能です。産学官連携は名工大は全国の大学の中

でもトップレベルですので、これを引き続き強化します。そしてもう1つは地域の生涯学習機会を提供する機能です。OBも含めて、社会人の教育、さらに、青少年への理科教育の提供です。こうした点を重視しながら、全部で81項目の中期計画を立てています。

すでにこの計画は承認されていますが、現在、22年度の年度計画を諮るところです。第一期はどこの国立大学もはじめての経験でしたので、毎年度、そのときにできることを年度計画としてつくってゆくようなところがありましたが、第二期は6年分の年度計画を立てて進めているところではあります。

北村 中々数値目標を出せないところがありますが、企業の中期計画と比べていかがですか？

篠田 企業では利益を生み出すという、唯一の目標があって数値目標を出しやすいですから、

名古屋工業大学 第2期（平成22～27年度）中期目標前文

我が国を代表する工科系単科大学である名古屋工業大学は、製造業が集積する中京圏に位置し、これまで社会・産業界からの様々な要請に的確に対応し、その発展・振興に貢献する人材を多く輩出してきた。20世紀後半以降、経済・情報のボーダーレス化が進む中で、快適で安全・安心な環境と社会を実現かつ維持するために人類が解決を迫られている課題の多くは地球規模になっている。本学は今後、地球全体を強く意識し、異なる価値観を相互に尊重しつつ国内外の大学・研究機関と連携し、人類全体の幸福と発展の礎となる科学技術の創造とそれに資する人材の育成を目標とする。

この目標の下、本学は「ひとづくり、ものづくり、未来づくり」を掲げ、未来社会を担う多様な人材を学生に迎える。学生には科学技術の工学的基礎を習得させ、その上で環境・社会的意義やビジネス化等の多面的な観点から、自ら課題を発見し解決する能力を獲得させる。さらに、独創的アイデアの源泉を培うべく広範な分野の基礎的及び発展的内容を学ばせ、日々変化する国際社会で活躍できるリーダーに育てる（ひとづくり）。また、国内外の大学・研究機関との連携により大学の教育研究能力を高め、自由な発想による創造的研究を行い、その成果を社会に還元する（ものづくり）。これらの人材育成・研究開発を通して基盤産業の革新と新産業の創成に貢献し、豊かな未来社会の実現を目指す（未来づくり）。

上記の基本方針を具現化するため、以下の項目に重点的に取り組む。

1. 「与えられる」教育から「自ら育つ」教育に重点を移し、高度な工学知識と実践能力を有する自立した研究者・技術者を輩出する。
2. 世界トップレベルの分野の研究を推進し、工科系の国際教育研究拠点を形成する。
3. 基盤産業の革新に貢献するリーダーと、新産業の創成に貢献するリーダーの育成を目指し、複線的な教育体系を実現する。
4. 国内外におけるトップレベルの大学・研究機関との連携を推進し、教育研究活動を高度化・多様化する。
5. 教育・研究・技術協力分野の国際交流を活性化し、国際的視野を持った学生・教職員を育成する。
6. 学生が大学構成員としての自覚を持って活動できる仕組みを構築し、学生参画によるキャンパスづくりを推進する。
7. キャンパスの情報化を推進し、環境と調和した快適なキャンパスライフを実現する。

そういう点では異なりますね。行政などでも中期計画を出していて、私も少し関わっていますが、漠然としたところが多いのです。それにくらべて大変よいと思います。すでに一期が終わりましたから、これを検証しつつ進めてゆくのがよいと思います。

また、計画は大学全体としてつくられていますが、学科ごとに大きな特色がありますから、各学科の教育類長にも強く押し出していただくのがよいでしょう。どのように優秀な学生を集めるか、そのためにはどのような特色を打ち出すかという観点も必要でしょう。

変化する世の中の研究分野

北村 高橋先生は既に管理側が長くなっていますが、これまであるいは今後の研究上の関心についても聞かせていただけますか。

高橋 学生時代はいわゆるマイニング、言葉をかえて資源開発工学などと言っている分野です。日本の鉱物資源が枯れているということで、それで地球資源工学科などへ変わってきているわけです。その中では鉱物処理に興味をもっていました。鉱物処理に浮遊選鉱という技術があります。石鹼をブクブクとさせて、それに親和性物質がついてあがってくる。バブルの浮力を利用して鉱物を分けるわけです。それで界面化学に興味をもちました。

卒業する時が50年のオイルショックでした。そのころプラントエンジニアリングに興味を

持っていました、エンジニアリング企業などを回りましたが、なかなか求人がありませんでした。そうこうしていると、ちょうど先輩の伝手で名工大でいわゆる窯業、粉に関連した研究職があるということで、名工大に赴任したわけです。

赴任した時、名工大は窯業技術研究施設ができたばかりで、若い研究者をさがしているということだったんです。いわゆる窯業の中で、粉末製品に関連した研究をやってくれということでした。そこにいる間に、窯業から無機材料、ファインセラミックス、ナノマテリアルと関わることになります。ファインセラミックスは柳田元名工大学長が提唱されていましたが、私自身は元々セラミックスには縁がなかったのですが、この分野がいつのまにか時代的に注目されるようになり、さらにナノマテリアルにまでなってきたわけです。

私自身は粉から材料、そして微粒子というか、粒子そのものを材料と考えることに興味を持っています。冒頭で界面と言いましたが、大きく言えば粉体プロセス工学的アプローチをずっとやってきました。数年前から特に、粒子材料などを研究するのに、環境とかエネルギーに役立つ材料を意識しています。さらにつくる過程においても低環境負荷、省エネを意識したプロセス開発、新しいプロセス開発に伴う新しい材料の創成を意識して研究を展開してきています。これからの工学は価値観のシフトがどんどん進んでゆくでしょう。たとえば、輸送機器でも情報分野でも、これまでは共通して大量、高速、低コストが重要要件だったと思います。この10年ほど、安全、安心、環境が別の価値観となってきました。情報などはセキュリティが機能よりもむしろ重要になってきています。この先、さらにそれを超えて、つくること、つかうことに喜びや矜持がもてる、つくること、つかうことに後ろめたさがないものづくりができないかと思っています。

走れば走るほど、大気浄化に貢献するとかい



う話も、一時ありました。何かそういう価値観がでてくるのではないかと思います。ずっといわれている産業空洞化のなかで、何をメリットにしてゆくかです。日本はこれだけ高い生産インフラ、人材資源があり、輸送網などが高集約されていますから生活列島として1次産業から2次、3次産業に有機的つながりを構築するようなことを考えてゆくことが大事だと思います。

大学戦略としては、強い分野は引き続き支援したいと思います。現状、セラミックスを軸に、材料、デバイス分野は名工大は大変強いですから、組織的支援をしたいと思います。もう1つは、第一期中期計画からずっと言っている異分野融合を進めます。医工連携、薬工連携に加え、第二期ではオール名工大を結集した、たとえば、輸送、ハードとソフトの組み合わせたスマートグリッドの分野、情報と材料の融合、福祉・介護、脳情報工学、バイオミメティクス、創薬、低炭素社会の実現などです。研究分野と課題が混ざっていますが、これらを整理したうえで、異分野融合を進めていきたいと思います。

北村 分野を変えるとき、これまでの知識や経験なども変わるとは思いますが、いかがでしょうか。

高橋 我々の時代は、東大闘争あるいは東大紛争で教室での勉強ができない時期でしたから、自学してゆく習慣がついたということがあります。分野がかわっても、用意ドンではじめれば、なんとかなるという自信もです。なんのなんのといつて、分野が変わってもそこに共通するところがある。逆に、それを活かすように研究テーマを考えてきたということです。

北村 企業に入れば大学で学んだことと別のことをやることになりましたが、篠田理事長もそういうところを通してこられたと思います。学生時代とどう違うかなど教えていただけますか。

篠田 昨年の学位記授与式の際、話したのですが、学部卒の学生さんでも会社に入っても思ったことができないからといってやめてしまう人

がいます。今の不況下でそれをやると本当に後で困ったことになります。大学の4年といつても、専門を勉強するのは2年から、それも汎用の工学ですから、勉強といつてもほんの少し勉強したにすぎないわけです。「俺はこんなことはやりたくない」では、大変難しいです。就職指導の先生も苦労されます。

これは当たり前の話です。私は大学の卒研では内燃機関を勉強しました。会社に入って内燃機関をやったかといつと、事業部長になってはじめて、エンジン事業部の事業部長になっただけで、内燃機関で仕事をしたわけではありません。先生方でも世の中が変わって研究の方向が変わってゆけば変わらなければならない。そういうことを学生が理解しているかどうか、大変大事です。先生方にもそういうことを教えていただきたいと思います。

高橋 学生の指導で話すのは、マスターが就職した後、知識だけを取り上げられれば学部卒で就職して2年たった人と比べて、また、高卒の人と比べて馬鹿にされるぞということです。しかし、修士の2年間では問題の見方、研究のアプローチを学びます。必要な知識は変わりますが、そこでの見方は勉強になるはずだと指導しています。ポリマーでも、メタルでも、そこで培った見方、アプローチは役立つ。自分の分野がすぐに生かせなかったといつて、がっかりすることないようにと指導しています。

北村 大学で最も大切な教育ですね。



広報委員会委員長 北村正

篠田 よく夢を見なさいと言いますが、お金を稼ぎながら自分の夢だけを追求できるようなことは中々ありません。夢の追求などという風潮のみが言われるのも困ったことです。

大学出と高校出の違いを考えることがあります。その人の才能、素質は学歴によっては変わりません。しかし、一般的には大学出の方が包容力が大きいことがあります。それはやはり、それだけいろいろなことを勉強しているように思います。高校を出てすぐに働き始めた人に比べて、いろいろな種類の人に接してきた時間や本を読む時間がある。修士の人はさらに2年ありますから、そこでどういう勉強をするのか、教養を学ぶのか、筋道のつけかたを学ぶのか。専門科目だけを学んだのではだめです。先生方でさえ、専門分野が変わるわけですから。

名古屋工業会へ期待すること

北村 次に、学生と名古屋工業会への期待をお話しいただけますか。

高橋 間違いなくOBが名工大の最大の財産だとつくづく感じます。そして名工大が創立以来の100有余年、その時代の要請に応じてしっかり優れた人材を出してきた。各OBがその産業社会の礎を築き、その繁栄を支えてきておられる。その矜持と誇りを持っていただきたい、ということを考えております。各人がこれを是非アピールしていただきたい。

また、名工大は優れた学生に入学いただき、質の高い教育を行い、トップの企業に就職頂いているわけです。これが大変順調なサイクルとして回っています。これからも優秀な元気のよい学生に入学いただけるよう、お知恵を貸していただきたいというのは1つのお願いです。

また、名古屋工業会からは既に、トップセミナー、キャリア教育に協力を頂いていますが、他にも是非、教育面で参画いただければと思います。1つは、標準化の問題は企業の皆さんは強いと思います。以前にあったVHSとベータ

の方式の話なども、今の学生はあまり知らないと思います。衛星放送の方式についても日本はうまくいきませんでした。こうした標準化の問題はOBから教えていただくことが多いと思います。他にも、初等・中等レベルの科学技術教育もOBにお手伝い頂いてやっていけるかもしれません。課外活動などについてもあるでしょう。

篠田 学生のインターンシップももう少し進めてもいいかもしれませんね。会社に入って、ただ作業をするだけでもいいのではないですか？会社もお客さんを迎える気持ちではなく、給料を出すからやってみろ、でもいいのではないのでしょうか？

北村 本学のキャリアサポートオフィスが学生と企業のあいだに立ってインターンシップを斡旋してくれています。情報工学科／専攻では3年生と修士1年で10人ちょっといます。感想をもらっていますが、やはり企業でのきびしさがわかったなどの意見が出ています。いくらかは社会とのつながりを意識してくれているでしょうか。

高橋 名古屋工業会はやはり、就職の面からの強力な支えですが、逆に工学の人材として社会に輩出し、働き出してから、本当に勉強したいことが分かって、その時もう一度勉強したいことがあったときに、それを提供できるしくみ、生涯学習、永遠学生のしくみも考えられればと思います。

もう1つは、松井先生が遺された言葉ですが、



「ブランド力」です。名工大は実力はあるのに、中々認知されていない、悔しい面があります。名古屋工業会とも是非、協力いただきこの面でも強化したいと思います。今度、広報戦略室を大学に整備しましたので、担当副学長には知恵を出してもらおうと考えています。

最後に、「いつも母校をウオッチング！」と言いたいと思います。スポーツではないですが、観客がプレイヤーの元気を出すところがあります。卒業した後も、名工大の先生が何をしているか、在校生はどうだろうと見ていただけるとよいと思います。最近はやりのツイッターなんかも使えるかもしれませんね。「〇〇先生の記事を読みました」なんて、言ってもらえば奮起しますね。そのためにも大学が発信していかなければなりません。

北村 今は、同窓会誌の「ごきそ」が大学の情報を同窓生に伝えています。

篠田 「ごきそ」はその点で好評です。卒業してからはなかなか大学の情報を知る機会が少なく、社会に出てから仕事の中で大学と接触したと思った時、どこにどうしたらという場合が出てきます。研究紹介でも誰がどんなことをという広い紹介が欲しいのです。大学の情報が入り、同窓生の中で頑張っておられる方の情報が入ってくるというのが、「ごきそ」のよいあり方だと思いますし、大学への帰属意識を高めることにもなります。

私たちの先輩なども、とても母校への気持ちは強いですよ。同窓会への厳しい注文もいただきます。私たちの年代も会社の中でよく頑張っています。卒業生の求人についても熱心で、よい学生を求めていますから、これが名工大の就職のよさにつながっている面がありますね。

学生へメッセージ

北村 最後に学生諸君へのメッセージをいただけますでしょうか。

高橋 まずもちろん、しっかり勉強してもらい

たいと思います。これに加えていくつか申し上げたいと思います。

一つは、明確な倫理観と確固たる価値観をもった技術者になってもらいたいということです。第二に、先ほど中期計画の1つの目標としても申し上げましたが、受け身ではなく自ら学ぶ姿勢で臨んでもらいたいということ、そして単に技術者になるのではなく、基盤産業の革新につながるリーダー、産業創成へのリーダーとなることを自覚してもらいたいと思います。また、大学の中では学生の皆さんも名工大の構成員であるという自覚をもっていただき、いろいろと提案してもらいたいと思います。先ほども少し話題が出ましたが、キャンパスミーティング等では是非発言をしてもらいたいと思いますし、また、大学としてもいろいろな機会を作りたいと思います。今度、創・省エネコンテストという企画を行います。また、名工大グッズ、ごみの3R（少量化、再利用、再資源化）やキャンパス清掃等にも是非、参加してもらえればと思います。

また、大学時代は授業だけでなく、いたる時、いたるところが勉学の場所だと心得て有意義な時間を過ごしてもらいたいですね。もちろん第1は授業の中での勉強ですが、課外活動にも、旅行にも、アルバイトにも積極的に集中して取り組めば吸収できることがたくさんあります。

もう一つ、最後に大学は人類がつくりあげた最高の制度の一つと考えています。年齢的には働いてもよい年齢であるにも関わらず、勉強でも、課外活動でも、自由に時間を使うことを社会が許してくれているわけですから、是非、よい時間を過ごしてもらいたいと思います。

篠田 本当にそうですね。高校だけで卒業した人はこういう時期を経験していないわけですから、かわいそうだなあと思うほどです。

北村 新入生によく話しますが、一年のうち、講義は150日、自由に使える時間は210日なんです。210日をどう使うかですね。

理事長からもメッセージをいただけますか。

篠田 やはり工学の勉強をすると、工学の基礎的問題、どこに問題があるとか、基礎的なことが分かるようになります。機械工学などは典型で、いろいろなことを少しずつ勉強します。ロケットの燃料のように、どこで活かされるかわからないことまで勉強します。しかし、これは財産です。会社に就職したとき、そういう広い知識と、理解力、人付き合い、リーダーシップが役立ちます。

声が大きいことも重要です。そのためには体育会系のクラブが役立つかもしれません。体育会の連中は、勉強する時間がないですから、あまり成績はよくないかもしれません。しかし、人との付き合いなど、そこから学ぶことも多いはずです。多少理不尽でも言うことを聞くということも、会社に入って意外と役立ちます。会社にはいって、自分のやりたいことができるわけではありませんし、設計や研究部門だけで会社ができているわけではありません。管理部門で部下をどう使うかということが大事になることもあります。

北村 理事長は学生時代はヨット部でしたから、連絡のためには大きな声が必要だったわけですね。

篠田 本当に世の中は変わります。変わってもやっていけるという自信を持たなければいけません。会社をやめて、うまくやっていく人もいますが、なかなかそういう訳にはいきません。

北村 学生の保護者の皆さんへ何かいただけますか。

高橋 名工大ではしっかりとした人間をつくりますので、安心して送り出してもらいたと申し上げます。また、ご子弟だけでなく、大学の活動も是非、注視頂いてご意見をいただければと思います。

篠田 名古屋工業会は同窓生の組織ですが、ご子弟の就職についても、またその後、お仕事で困った時でも色々な人材で大学と連携してゆきますので、ご協力をいただければと思います。

北村 本日はありがとうございました。

高橋実 新学長の経歴

昭和24年4月1日生

昭和50年3月 東京大学大学院工学系研究科資源開発工学専門課程修士課程修了

昭和59年4月 工学博士（東京大学）

昭和50年4月 名古屋工業大学助手（窯業技術研究施設）

平成6年4月 名古屋工業大学教授（セラミックス研究施設）

平成15年4月 名古屋工業大学セラミックス基盤工学センター長

平成16年4月 名古屋工業大学副学長

平成18年4月 国立大学法人名古屋工業大学理事

平成20年4月 国立大学法人名古屋工業大学理事・副学長

平成22年4月 国立大学法人名古屋工業大学学長

篠田陽史 名古屋工業会理事長の経歴

昭和33年3月 名古屋工業大学工学部機械工学科卒業（M33）

昭和33年4月 (株)豊田自動織機 入社

昭和56年6月 (株)豊田自動織機 取締役

平成7年6月 (株)豊田自動織機 代表取締役副社長（平成11年6月）

平成11年5月 大興運輸(株) 代表取締役社長（～平成15年5月）

平成11年6月 (株)豊田自動織機 顧問（～平成17年10月）

平成20年5月 名古屋工業会理事長

現在 名古屋工業大学経営協議会委員、学長選考会議委員、名古屋工業大学研究協力会副会長兼任